

セッション 二

統一思想によるアダム・スミスの道徳哲学批判

トマス・J・ワード

一 序言

文鮮師の教えから発展せしめられた統一思想は、膨大な範囲の人間の努力に対して様々な意味合いをもった新しい世界観を提示している。今世紀に入って、マルクス主義と実存主義が文化や社会に対して重大な影響を及ぼしてきた。二十一世紀に向かうに当たって、統一思想が脚光を浴びることになるだろう。マルクス主義と実存主義は、人類の諸問題を扱うことができる枠組みを提供することができないことがわかっている。そのため、今や新しい世界観が必要とされているのである。

統一思想はその中心に原相論を含んでいる。原相に対するこの見方は、人間の神に対する新しい関係への道を切り開いている。それはまた、人類の最も根本的な問題を解決するための重大な判断の基準をも提供している。この論文発表において、我々は、統一思想がいかに経済の成長や発展に関するいくつかの倫理的な問題に対して解答を提示することができるかを示すことにしよう。

二 新しい世界経済の中心としてのアジア

第二次世界大戦後、米国は、世界の指導的な軍事、政治および経済の大国として現れた。ヨーロッパにおけるアメリカの同盟国、例えば、英国やフランスは、急速な戦後経済復興を経験した。戦後、東アジアは世界経済において小さな役割しか演じていなかった。一九六〇年になっても、日本の銀行は世界の上位五位の銀行の中に日本の銀行は一行も含まれておらず、ましてや韓国や台湾の銀行はいわずもがなであった。

一九七〇年代に、東アジアは明らかに世界市場に自らを確立した。一九八〇年代終わりころには、世界のトップ五大銀行のうちの四つは日本であった。一九九五年には五五八〇億ドルの外国資産を保持しており、それにより日本は、世界の歴史上最大の債権国になるだろうと予測されている⁽¹⁾。四つの小さなドラゴン、韓国、台湾、シンガポールそれに香港は、日本の発展パターンを模倣して、GNPでみごとな年間成長を記録し続けている。

東アジアの経済発展に対しては複雑な反応がある。米国においては、日本、韓国およびシンガポールのような国々は、西洋に多量の製品を輸出しながら自国へは輸入を制限し続けていることに対して非難されている。

貿易政策における食い違いを再検討することには、いくらかの有効性があるかもしれないが、統一思想は、東アジアの成長と発展のより深い原因を指摘している。統一思想の創始者、文鮮明師は、神の摂理がアジアに向かつており、東アジアは神の理想の実現において中心的な役割を果たさだろうと教えておられる。

数多くの文書やスピーチで文師がしておられる⁽²⁾予言は、最近数十年間の経済発展によって確認されているように思われる。一九六〇年代において、世界の貿易の最大の量は、なおヨーロッパと米国の間のものであった。一九七〇年代において、これは移動し、貿易の最大の量が米国とアジアのものとなった。我々が一九九〇年代に入るにあたり、世界の商業の中心は再び東アジアへ移行した。東アジア諸国間の貿易量そのものは、今や米国と東アジアの間の貿易量を超えている。東アジアは、世界の経済的な中心として立ち、文師が新しい世界文化圏の出現として予見しておられるものための物質的な基盤を確立しつつある。ここでは、東アジアのすべてと特に韓国が摂理的な役割を果たすよう求められている⁽³⁾。

統一思想の見方によれば、東アジアの経済的な優越に対して数多くの理由があるのを我々は、理解することができる。外的な見方によると、ヨーロッパと米国は、最近まで、それ以外の世界に対して技術的な優位を得ること

とを通して、その経済的な優越性を維持してきたことは明白である。テレビ、ラジオ、自動車、飛行機、コンピュータおよびマイクロチップの出現は、みなヨーロッパあるいはアメリカの発明家に負っているのである。

第二次世界大戦後、人類は「情報化時代」に入った。一カ国において発明されたり開発されたものを、今ではたちまち、どこか他のところで複製ないしコピーし、改善することができる。今日、エルサルバドルのような、低開発の、戦争によって引き裂かれた国でさえ、マイクロチップの輸出国になっている。「情報時代」において、経済的な成功は、だれが何を最初に発見したかよりも、企業家が競争価格で、(求められている)最良の品質の製品を生産するか否かにかかっている。

経済発展の根底には道徳的および倫理的⁽⁴⁾問題があるというのが、本論文における我々の立場である。価格と品質は、企業と顧客の関係、特に労使関係のような要素によって明白に影響される。伝統的にヨーロッパや米国における労使関係には緊張が存在してきた。英国の労働者階級に関するロバート・オーエンの著作やエンゲルス⁽⁵⁾の初期の著作は、企業家が労働者をいかに倫理的に扱いそこねてきたかを文書で証明している。マルクスによって論じられた資本家・労働者を対立的に捉える主張は、真の意味において、労使の緊張を極端にまで押し進めたもの他ならない。

労働者の取った立場は、資本家(今日ではその代理人、すなわち経営者)は、彼らを倫理的に扱ってこなかった、というものである。資本家は利己的な利害に関心を払うことしかせず、労働者を搾取してきた、と彼らは主張する。米国では、労働者は一九三五年のワグナー法の制定を通じて、経営者と対等に向かい合う強い交渉上の地位を勝ち取った。それ以前の時代は今でも「経営者の黄金時代」と呼ばわれており、その意味するところは、ワグナー法が制定されるまで経営者は労働者を意のままに扱ってきた、ということである。一九三五年の時点であ

アメリカの経営者たちが心の姿勢を転換しなかったこと、すなわち、彼らは法の規定を守ったにすぎなかったのだということは、人々の間で広く抱かれていた考えであり、間違いなく正しい。ヨーロッパやアメリカの労働者層が、経営者に対してもつ不信感は、今日も継続しているのである。

日本や韓国のような東アジア諸国が西洋を超えることができた主要な理由の一つは、これらの諸国がその労使関係においてより大きな和を醸成したことに基因している。倫理の観点から見ると、これらの諸国は、儒教的な大家族のモデルを労使関係の基礎としている。このモデルは、決して完全とは言えないものの、労使間に、西洋において見いだすよりも大きな理解を醸成してきたのである。スタンフォード大学の労働法の教授であるウィリアム・グールドは、日本で数年間をすごし、日本の労使関係を研究した。彼は、日本の労働者の側には、自分たちが使用者によって公平に扱われるだろうという、西洋よりもはるかに大きな信頼感があることを結論づけた。このことが彼らを元気づけて犠牲となるようにさせ、年間休暇時間の三分の一を慎しむようにさえさせており、このことは西洋ではほとんど見られない現象であると指摘している。

最近の数カ月の間に、我々は、文師が予言し、統一思想研究院が一九八五年の『共産主義の終焉』宣言を通して宣告したように、マルクス主義の崩壊を見てきた。本論文は、統一思想が社会的および経済的な問題に対するマルクス主義のアプローチの欠陥を明らかにしているばかりではないということ論じらる。統一思想はまた、レーガン大統領在任中、英国やアメリカの保守主義者が唱えた政治的・経済的な解決策の欠陥についての洞察をも提示している。保守主義者によれば、もし西洋が英国の経済学者アダム・スミスによって展開された経済的および道徳的な諸原理を実行に移すならば、西洋の社会、組織および労働の諸問題は自動的に解決されるといふ。本論文の残りの部分では、道徳・倫理に対するスミスのようなアプローチがなぜそのような諸問題の解決に不十

分であるかを示すことに焦点を絞ることにしよう。また、願わくは、我々は、なぜアダム・スミスではなく統一思想が、他の諸々のことのほかに、社会および組織の和合を促進するような道徳的・倫理的モデルを提示できるのかも示したいと思っている。

三 経済学に対するアダム・スミスの貢献

経済学に対する、また道徳哲学に対するアダム・スミスの貢献を低く評価することは、我々の目的とするところではない。スミスは明らかに近代経済学の権化である。同様に、『道徳情操論』(The Theory of Moral Sentiments) を読むと、完全性と道徳的責任を伴った生活をするのことに對する彼の関心の深さがわかる。

スミスは企業家に対して同情的であるとしはば描写される。しかし、これはスミスの関心の範囲に對する正確な描写とはいえない。スミスは、企業家の重要な役割を認識していたが、リカードやマルクスと同様、労働をすべての商品における共通な要素と見ていた。地主や企業家もまた利益の一部を受けるに値することをスミスは認識していたけれども、同時に労働をあらゆる商品の価値の重要な源泉とスミスは見ていたのである。輸入品への重い関税に對するスミスの強烈な反対さえも、大部分は、そのような関税が貧しい労働者により高い国産品(あるいは、関税のかかった外国製品)を買わせ、従って、労働者の購買力を減退させるのではないかという彼の心配から来たものであった。

スミスの経済学に對する貢獻についての簡潔な要約は、経済学者ロバート・C・ハイルブローナーの著作に見いだされる。

アダム・スミスの市場法則は基本的に単純である。アダム・スミスの市場法則は、ある社会的な枠組みにおいてある種の行動の結果が完全に明瞭かつ予見可能な結果を引き起こすだろうということを我々に教えている。具体的に言えば、それはさらに、同じように動機づけられた個人たちの（いる）環境において、個人的な私利の衝動がいかに競争をもたらすかを我々に示す。またそれは、いかに競争が社会の必要とする商品を、社会の欲する量だけ、また社会が支払う用意のある値段で供給せしめるかを示す。以上のことがどのように起こるかを見てみよう。

それが起こるのは、まず第一に、私利が、何であれ、社会が喜んで代価を支払うような仕事に人間を導いていく原動力として働くからである。われわれが自分たちの食事を対するのは、肉屋や酒屋やパン屋の仁愛にはなくて、かれら自身の利益に対するかれらの顧慮に期待してのことなのである。われわれは、かれらにわれわれ自身の必要を語るのではけっしてなく、かれらの利益を語ってやるのである」とスミスは述べている。

しかし私利は像の半分ではない。それは人々を行動へ駆り立てる。それゆえ、何か他の働きによって、利益に飢えた個人の猛進のために社会が過度に威嚇され代償を要求されることのないようにしなければならぬ。私利によってのみ動かされる社会は、無慈悲な不当利得者の社会である。この調整者が競争つまり市場における私利を持った行為者たちの争い (conflict) である。各人は、社会的な結果については一切

考えずに自分のために最善を尽くそうとしており、全く同じボートに乗っている、同じように動機づけられた個人の群れに直面する。各々はその隣人の食欲を利用することに全く熱心である。自分の私利のために自制心を失った人間は、競争相手がいつの間にか自分の商売を奪い去っていることに気づくであろう。もし、彼が、その商品のためにあまり多くの代価を請求しすぎたり、あるいはまた、自分の従業員に、他のだれもが支払うような給料の支払いを拒否するならば、彼は、一方の場合には、買い手がいなくなっていることに気づき、またもう一方の場合には、従業員がいなくなっていることに気づくであろう。

スミスの経済理論は十八世紀の英国の状況において見る必要があるということを再び思い起こしてみよう。当時、スミスは決して現状（体制）の擁護者ではなかった。彼の経済理論は当時の抑圧的な重商主義——それは、英国やフランスのような、植民地をもった強国が（そうした国々の最も裕福な商人たちと共同して）アメリカやアフリカ、アジアにある彼らの植民地に彼らの製品を押しつけることを認めるものであった——に挑戦したのであった。スミスは、これらの国々がその港湾やその植民地の港湾を互いに開くようにと呼びかけたのであった。スミスは、一国の市民には、何を買ひ、また何を買ひべきでないか、どこで働き、またどこで働くべきでないかを選択するための、可能な限り最大限の自由を認めるべきであると主張した。「見えざる手」（彼はこの言葉をその著述においてめったに使わなかった）は、どの商品のために生産を増大、あるいは減少させたいかを經濟（機構）がわかるように導くとスミスは論じた。同様に、需要に基づいて、労働者はどの技能を開発したいのか、またどの場所で雇用を求めたいのかを知ることができるだろうと彼は主張した。投資家はその資本をどこで増加させたいのか、あるいはどこで増加させないようにしたらいいかを知るだろう。自由市場によ

って、経済は、過剰な政府の介入の必要なしに、調和的に機能することができると彼は論じた。

四 アダム・スミス問題

しかし、スミスは単なる経済学者ではなく道徳主義者でもあった。彼の初期の作品『道徳情操論』（一七五九）は、スミスが道徳問題に取り組んだ、その度合を示している。本論文の筆者の見方からすれば、『道徳情操論』はこの方面におけるスミスの観察がただ単に知的な考察の結果ではなかったことを明らかに示している。それは、スミスが生活体験から、つまり自分が主張した規範に一致して生きようとした彼の熱心な努力から生まれたものであった。⁽⁶⁾

スミスの二つの最もよく知られた学術的な貢献は、『国富論』（一七七六年）と、それより以前の作品、『道徳情操論』であった。『国富論』では、スミスは、経済的進歩と調和の鍵として私利（セルフィンタレスト）に優越的な役割を割り当てた。彼の、初期の作品、『道徳情操論』において、スミスは、道徳的な命令として、他人に対する「同感」（sympathy）の役割を強調した。一般に、スミスは、社会発展のための主要なモチーフとして「同感」から「私利」へ転換したと言われており（これは「アダム・スミス問題」と言われている）、これは、資本主義が非人間化し無感覚になった理由の一つであると考えられているものである。

保守的な社会思想家であるマイケル・ノーバックは、その一九八一年の作品、『民主主義的資本主義の精神』（The Spirit of Democratic Capitalism）において、『国富論』（一七七六年）におけるスミスの道徳的態度において、また『道徳情操論』（一七五九年）に見いだされる態度において、変化があったと論ずる人々を非難している。ノー

バックは、『道徳情操論』には六つの異なった版があったと指摘している。それぞれがアダム・スミス自身によって入念に再検討された。ノーバックは、スミスがこの作品を再検討した最後の時期は一七九〇年で、これは『国富論』の出版から十四年後のことであったと記している。スミスが自らの基本的な主張を逆転させなかったということは、スミスにとっては、矛盾はなかったのだということを示しているように思われる。

「アダム・スミス問題」の支持者に反駁する際に、ノーバックは、『道徳情操論』において、スミスはすでに「あらゆる自己」は個人的であると共に社会的であり、利己的であると共に情け深い⁽⁸⁾ことを認めていたと示唆している。ノーバックはそれにつけ加えて次のように言った。「どれがより高い徳を意味するかについては、『他人に大いに同情し自分自身のことはほとんど顧みないこと、自分の利己的な愛情を抑制し自分の情け深い感情を満足させることが人間性の完成を構成する』ということはスミスにとっては絶対的に明白なことであった」。

ノーバックがさらに付け加えて言うには、スミスは『道徳情操論』において、「万人は疑いもなく、生来的に、まず第一に、また主として、自分自身の管轄下に委ねられており、人は他のだれかよりも彼自身の面倒を見るのに向いており、そうであるということはふさわしいことであり、また正しいことである」⁽¹⁰⁾と書いた時、すでに私利の重要性を擁護していたのだという。

スミスはその著述において首尾一貫していると、ノーバックは説得力をもって論じている。ノーバックの分析は、「スミスは初めから同感の重要性を認識していたが、私利の役割をも認識していたのだ」という見解を裏付けることになる。スミスにとって、私利は内在的な悪ではなく、社会の福祉を前進させる人間性の一部であったとノーバックは述べている。

『民主主義的資本主義の精神』において、ノーバックは、「アダム・スミス問題」の支持者を説き伏せ、スミスの

道徳哲学はその経済理論と首尾一貫しており、またその基礎となりうることを示したように思われる⁽¹¹⁾。にもかかわらず、統一思想は、さらに一歩先へ進んで「スミスの道徳哲学が正しいのかどうか」また「それが社会や組織の調和と繁栄を促進させることができるのかどうか」を我々が問うように仕向けている。

五 公正な観察者

「同感」はアダム・スミスに特有のものではなかった。我々はデービッド・ヒュームの道徳哲学に同様な「同感」への言及を見いだす。アダム・スミスの見方がヒュームの見方とは異なるようにさせるものは、「公正な観察者」についてのスミスの論述である。スミスは、(1)自分をどんな道徳的なジレンマからも救い出し、(2)スミスが「胸中の人間」と言っているものをして裁判官を務めさせる必要性について語っている。人が正しい判断をすることができるのは、自分の意見を他人がどう考えるかによるのではなく、「胸中の人間」を評価の基礎として用いることを通してである。

全智全能の自然の創造主は、人間に、自分の仲間が自分の行為を是認する場合には、多少とも喜びを感じ、またかれらがそれを否認する場合には多少とも心を傷めるといふふうにして、仲間の情操と判断とを尊重するように教えた。…

このようにして個々の人間は人類全体の直接の裁判官となったのであるが、しかし、それはただわずかに

第一審法廷における裁判官になったにすぎず、人間の判決に対してははるかに上級の裁判所、すなわちかれら自身の良心の法廷、すなわち想像上の公平無私にして博識精通の見物人の法廷、すなわち胸中にひそんでいゝるが、しかしかれらの行為の偉大なる裁判官であり、調停者である人間の法廷に控訴することができるのである。これら二つの法廷の裁判権は、ある点においては相似し近縁関係を有しているとはいえず、しかし実際には相異なる全く別の原理にその基礎を置いているのである。外部的人間 (the man without) の裁判権は、完全に現実の称讃に対する欲求と現実の非難に対する反感ともとづいている。内部的人間 (the man within) の裁判権は、完全に称讃に傾くことに對する欲求と、非難に傾くことに對する反感とに基づいている。すなわちそれは、われわれが他の人々の場合に愛したり感心したりする性質を自ら得たり、そのような行為を自ら行つたりしたいという願望と、他の人々の場合に憎んだり軽蔑したりするような性質を自ら得たり、そのような行為を自ら行つたりすることに對する恐怖にもとづいている。もし外部的人間が、われわれの行わなかつた行為もしくはわれわれを何ら動かさなかつた動機に對して我々を称讃するようなことがあるとすれば、内部的人間は、ただちに、自分達がそのような称讃に傾いしないということを得ている以上、そのような稱讃を受け容れることは自分を卑劣なものにするぞ、とわれわれに教え、そうすることによって、このような根柢のない稱讃のためにともすると奢り昂ぶろうとするわれわれの心を抑え付けることができるのである。

『道徳情操論』は、スミスが良心の人であつたことを明らかに示している。統一思想の見方からすれば、スミスは心情の人であつたと人は言うかもしれない。

六 アダム・スミスの道徳および倫理観に対する批判

『道徳情操論』を丹念に読んでみると、スミスは大変発達した善悪の感覚を持っていたことがわかる。にもかかわらず、統一思想は、倫理と道徳に対するアダム・スミスのアプローチの限界を指摘する。例えば、統一思想はスミスの「公正な観察者」の概念に異議を唱える傾向があるであろう。統一主義は、人間の良心はおもに、個人が自分の真理観と認定するものによって影響を受けると教えている。『概説統一原理』(The Outline of the Principle) は次のように述べている。

しかし、墮落した人間は善に対する絶対的な基準を失ってしまっており、従って、彼らの良心の基準は、何が真実であるかということに対する彼らの意見によって互いに異なる。異なった見解または神学が保持されているところではどこでも、異なった良心の方向が存在することになる。⁽¹³⁾

この点を例示するためにいくつかの実例を引用してみよう。アレクサンダー・ソルジェニーツィンは、『収容所列島』において、マクベス夫人をスターリンと比べる時に、この明確な実例を示している。権力を追求して、マクベス夫人は彼女の夫の王冠への昇進を促進するためにいく人かの人々を殺した。自分の殺人行為のためのやましさにやりこめられ(さいなまされて)、マクベス夫人は精神異常に追いやられる。他方、ヨセフ・スターリンは、権力を追求してわすかばかりの人々を除去したのではなかった。彼の粛清は何百万人の死に終わった。ソルジェ

ニーツインは「スターリンはマクベス夫人と同じ運命に苦しんだのではなかった。なぜならば、レディー・マックベスと違い、彼は自分の殺人を正当化するイデオロギーを持っていたからである」と述べている。『反抗的人間』において、フランスの哲学者アルベール・カミュは、レーニン主義とナチズムに関して論評し、次のように書いている。

我々は完全犯罪の時代に生きている。我々の犯罪人は、もはや愛を言い訳に持ち出すような子供じみた人間ではない。彼らは大人であり完全なアリバイ——哲学を持っており、それはどんな目的のためにも使えるのである。それで殺人者を裁判官に変えてしまうこともできるのだ。⁽¹⁴⁾

統一思想は、「公正な観察者」ではなく絶対的な価値基準の必要性を強く強調する。スミスのような、ある種に高度に直観的な個人においては、「公正な観察者」は道徳的な決定にたどり着く際に、貴重な役割を演じることができ、また実際そうした役割を演じてきたけれども、「公正な観察者」⁽¹⁵⁾は普遍的実在であるようには思われない。そのような仮説的な観察者は、一定の人が採用する真理観にとっては、しばしば公正でないことがあるであろう。絶対的な基準なしには、人間は善と悪が何を意味するかを決定するのに困り続けるであろう。このことは、人々が婚前の性、開放結婚 (Open marriage) や同性愛のような不道徳的な行為の追求を正当化されているように感じる西洋では、特に顕著である。なぜなら、そのような行為は二十世紀の哲学者によって、またいく人かの現代の宗教指導者によっても擁護されているからである。

統一思想は、次のような点についてもスミスを批判するだろう。というのは、スミスの「公正な観察者」の提

案は、いかに人間の道徳的な基準を向上させることができるか(という問題)への真の洞察を提供してくれない。スミスにとっては、道徳的な決定は、極めて直観的で、「公正な観察者」に耳を傾けることに基づいている。統一思想は、ある人々は他の人々よりも善に対する大きな傾向性をもって生まれていると論ずるであろう。スミスの著述は、より低い道徳基準の人々がいかにより高い道徳基準を習得できるかを示してはいない。

七 スミスの見解に対する統一思想の代案

この問題に関して我々は詳細にはたち至らないけれども、スミスの道徳哲学に対する統一思想の代案へ進む前に、統一思想にとって、「倫理」と「道徳」は同じ意味を共有してはいないということを我々は述べるべきである。統一思想のテキスト Explaining Unification Thought は次のように説明している。

倫理と道徳は通常ほとんど同一と見られている。統一思想がなしている区別は、倫理は家庭生活の基準であるが、道徳は個人的な生活のための行為の内的な基準であるというものである。人が会社に属していたり、スポーツをしようとしまいと、あるいは実際、彼が何をしよう、またたまたどこに彼がいようと、彼に要求される一定の行為の基準というものがある。家庭生活のための人間の行為の基準は倫理と呼ばれている。

他方、道徳は、個人の内的な良心、つまり当為性に基づいた個人のための行為の基準である。存在論的には、人

間は個性真理体であるとともに連体でもある。彼が連体として遵守すべき行為の基準が倫理である。

道徳は神によって与えられた第一祝福（個性完成）の成就と関連している。倫理は第二祝福（家庭の完成）と関連している。統一思想の見方において、道徳は、人間の本性、つまり生心と肉心との調和的な授受作用を通して実現される性相と形状の統一体の形成からなり立つ⁽¹⁶⁾。

(一) 対象意識

我々の批判において明らかになったように、統一思想は、スミスの「公正な観察者」を、何が道徳的に（また倫理的に）受け入れられ、また何が受け入れられないかがわかるように万民を教え導く普遍的な実在として、受け入れることはしない。そのかわり、統一思想は、各人が真に道徳的になるためには、「対象意識」を求めなければならぬ⁽¹⁷⁾ということを強調する。特に、我々は、神に対して、また神の心情に対して、対象意識を持つようにならなければならない⁽¹⁸⁾。統一思想によれば、「墮落した人間は他人を愛することを難しく感じるが、もし彼らが神の心情と一つになるならば、彼らの生活は愛そのものの生活となるであろう⁽¹⁹⁾」。スミスとは違って、統一思想は、人の道徳基準を改善する具体的な方法を提示している。というのは、統一思想は、いかにそのような対象意識が得られるかを説明しているからである。まず第一に、統一思想に、おいては成長期間が必要とされる。

人間は神に似るように創造されている。しかし、彼は生まれた瞬間に神に似るのではない。神に似るためには一定の期間が必要とされる⁽²⁰⁾。

二番目に、統一思想は、対象意識と道徳的な発展を促進させるために、成長過程においてかなめとなる重要な

制度として家庭を指摘している。統一思想は、神に対する、また神の心情に対する認識は、特に父母が子女に教えなければならぬことを明らかにしている。

統一思想の教育に関する部分は、神の心情のさまざまな側面を叙述し、いかに父母は子女がそれらを理解するのを手助けすることができるかを説明している。統一思想はまず神の「希望と期待の心情」⁽²¹⁾を叙述する。それは、神が全創造過程を通過して行く時に表れ、神の最初の子女であるアダムとエバの創造をもって頂点に達した。アダムとエバが神の理想を成就し、三つの祝福をなし遂げてくれる日を神がどれほど慕いこがれたかを子女が理解するのを父母は助けてあげるべきである、と統一思想は教えている。墮落が起こるまでは、彼らが日々そうした究極の目的の達成へますます近づきつつあったので、神は鼓舞され感動されたのであった。

人間の墮落のために、不幸にも、父母がその子女に教えなければならぬ神の心情には、他に二つの側面があるということ⁽²²⁾を統一思想は強調する。(その一つとして)神の「嘆きと悲しみの心情」がある。ここで、神の最初の子女が墮落の犠牲になった時、神がご自身のうちで感じられた悲劇的な嘆きに統一思想は触れている。子供が不幸な苦痛の道をたどる時、父母は苦悶する。それと同じ意味で、神もまた、その最初の子女が霊的な死を経験した時に、言語に絶した苦悶を耐え忍ばれたに違いない。

家庭を通して、子女はまたその父母から神の「苦痛の心情」⁽²³⁾を知るようになっていく。各々の人間は神の子女であるので、責任感のある父母はその子女の一人をも見捨てること⁽²⁴⁾ができない。それと同じように、神も人類を見捨てること⁽²⁵⁾ができないのだと統一思想は教えている。歴史路程において、神は何度も人類をその本然の理想にたち返らせようとしてこられた。

繰り返す、神は、一定の世代の中で最も正しい個人を選んでこられた。神は、自分からより遠い人々に手を差

しのべることができるよう、逆にもっとも容易に愛することのできる人々を犠牲にされた。神が、ノア、アブラハム、ヨセフ、モーセ、エステル、聖ペテロ、聖パウロ、アッシジの聖フランシスのような信仰者たちに窮乏、迫害や死にさえも遭わせること——それにより、神は神の愛を受けるのにもっとふさわしくない人々に手を差し伸べることができた——は神にとってどんなに辛いことであつたらうか。

拒否され続け、食糧も住居もない日々を送り、公然とした屈辱とさびしい死で終わったイエスの生涯を考える時、神の究極の「苦痛の心情」が（そこに）現れていることを父母は（子女に）説明することができる。イエスの心情は彼の父の心情に大変近かったので、イエスが最後の息を引き取る時、彼は彼の父に「彼らをお許し下さい、彼らは自分が何をしているかわからないからです」と大きな声で呼びかけた。神も、イエスが信じたように、人類は自分が何をしているかわからないのだと信じ、人類の残酷さと貪欲さを何度もゆるされた。しかし、それで神の苦痛が和らぐのではない。イエスが人類に対する神のあわれみを求めて叫んだとすれば、それは、イエスが「対象意識」を獲得しておられ、神の苦痛の現実を知っておられたからである。

(二) 家庭を基盤とした倫理の必要性

理想的には、家庭は、神の心情の本質を引き継ぎ、また対象意識を得る方法を、我々が皆、父母を通して教わるべき場所となっている。対象意識を得てから、我々はさらに「主体意識」を得て（例えば、父母、政治的指導者、企業家などとしての我々の立場で）、自分が責任を持つ人々と愛をもってかかわる方法を知ることができる。家庭は、人々があらゆる階層の仲間たちとかかわることを学ぶところと定められていると統一思想は説明している。父母を愛することを通して、子女は、先生であろうと、雇用者あるいは指導者であろうと、社会における

年長者とかかわる方法を学ぶことになっている。子女はまた、兄弟姉妹を愛することを通して、同僚を愛する方法を学ぶ。家庭を通して、子女は自分より年上の人々を兄や姉として接し、またいくらか若い人々に対しては弟や妹として接することを学ぶべきである。父母になることを通して、彼らは自分の子女ばかりでなく、子女一般にも父母の心情を持つ。組織において、また社会において存在すべき関係のモデルは家庭であると統一思想が説明しているのは、このためなのである。アダム・スミスの「公正な観察者」は、個人および個人の責任に対する古典的リベラリズムの強調の上に立てられたものである。論理的な延長として、家庭および家庭の責任もまた強調されるべきであったことをスミスは認識できなかった。統一思想は、いかに家庭のモデルが企業や社会に適用されなければならないかを理解し、また「労使問題を根本的に解決するには、家庭倫理に基づいた企業倫理が確立されなければならない」ということを明確に教えている。²⁴

アジアと西洋の両方の知的伝統に対して深い認識をもった統一思想は、西洋が、スミスとマルクスの両方を超えて、倫理と道徳の新しいモデルを発展させるのを助ける上で、理想的なほどぴったりとしていると思われる。労使関係のような分野を改善するには、西洋は、スミスの個人主義を超えて、調和的な家庭を基礎としたモデルを受け入れなければならない。

八 アダム・スミスの生活に関する結論的な所見

統一思想は、「道徳および倫理的な問題は、神の心情に対する対象意識を開発させた土台の上で、解決できる」と強調する。これは、漸進的な過程であり、家庭という環境状況の中でなし遂げられることになっている。

アダム・スミスにとって、神が情の神であるということを理解するのは困難であった。スミスは、彼の前にグラスゴー大学で道徳哲学の教授であったフランシス・ハチェスンの知的な後継者であった。ハチェスンの宗教的見解は、シャフツベリ第三伯爵の見解から強い影響を受けていた。シャフツベリは「宗教に対する感情的なアプローチ」に対して強く反対し、それを彼は「情熱主義」と呼んだ。シャフツベリは、神に対して、感情的なアプローチではなく、むしろ知的なアプローチを強調した。この立場から、なぜスミスが神を情の神として理解しようとしたがらなかったかを我々は理解することができる。

『道徳情操論』において、スミスは、家庭を道徳教育のための最も重要な場と見、寄宿学校における教育よりもむしろ家庭での教育を訴えさせたのであった。

男の子を遠くの有名な学校で教育すること、青年を遠方の大学 (Gonville) で教育すること、若い婦人を遠方の尼僧院や寄宿制の女学校で教育することは、イギリスと同様にフランスの上流階級の生活にあって、もまた最も著しく家庭道徳を破壊し、したがってまた家庭の幸福を破壊する。諸君は、自分の子供を親に対して孝行な、兄弟姉妹に対して親切で愛情の豊かな人間に教育したいとは思わないか。もしもそのような教育したいと思うならば、自分の子供を孝行息子にならざるをえないような、また親切な、愛情の豊かな兄弟姉妹にならざるをえないような状態に置き。すなわちかれを諸君自身の家庭で教育せよ。かれらは、自分達の両親の家から、毎日礼儀正しく、しかも都合よく (普通教育を受けるために) 公立学校に通学するのである。しかしながら、かれらは常に家庭に居住させる必要がある。諸君に対する尊敬の念が、常にかれらの行為の上に非常に有用な拘束を加えるにちがいない。かれらに対する尊重の念も、またしばしば

諸君自身の上にならざる有益な拘束を加えるかも知れない。いわゆる学校教育 (public education) からどうにか獲得することのできるいかなる知識といえども、かような教育によってほとんど間違いなく必然的に失うところのものに対していかなる種類の賠償をもなすわけにゆかないことは確実である。家庭教育 (domestic education) は自然の制度であり、学校教育は人間の発明である。どちらが最も賢明な教育方法であるかは、今更改めて言う必要はないであろう。⁽²⁵⁾

この所見にもかかわらず、スミスは、家庭を、正しい社会関係および企業の (人間) 関係を醸成するための倫理的なモデルと見ることはできなかった。

この見過ごしは、もし我々がスミス自身の生活を考えれば、特に理解できる。まず第一に、スミスは片親の家庭の出であった。彼の父親は彼の誕生後わずか三ヶ月で亡くなり、彼は母親によって育てられたが、その母親は (その後) 決して再婚しなかった。第二に、スミスは一人っ子で兄弟や姉妹の経験を持たなかった。さらに、スミス自身は結婚せず、従って親となる経験を奪われていた。スミスの家庭に対する限られた経験は、道徳や倫理に対する彼の個人志向的なアプローチを説明する助けとなるかもしれない。

九 結論

我々がここに提示してきた内容において、アダム・スミスの道徳と倫理に対するアプローチにおける利点と限界を、統一思想の見方から探求することが我々の意図であった。既に述べた通り、スミスの「公正な観察者」の

提案は、ある限定された価値を持っているかもしれないが、それは限定的なものである。それは「公正な観察者」というのは直観的なものであって、墮落世界において普遍的なものではないからである。

統一思想は、道徳的および倫理的な決定を行うに際して、人間は真理の枠組み、つまり絶対的な価値体系から行動する必要があるということを強調している。統一思想はこの枠組みを提供している。統一思想は原相、神の創造目的、および人間の生と存在の目的を叙述している。

文師の教えを通して、神の本来の理想は達成されていないこと、また神と人類はそのため苦しんでいるということが示されている。神の心情、特に創造過程における神の「希望と期待の心情」、人類の墮落の悲劇ゆえに神の「嘆きと悲しみの心情」、および全復帰歴史の期間における神の「苦痛と苦勞の心情」を理解することは人間の責任である。

神の心情に対する感受性を開発するにつれて、人間は、神の子としての各人の価値を認識し感じるようになる。各人が神の子であるということは、全人類を共通の家族とならしめる。それで、我々は、家族関係において、また他のすべての人間関係（労使関係および南北関係を含めて）において、我々は我々がかかわり合っている人々に対して神が感じておられることを思い、それに対する対象意識をもって行動するようにならざるをえなくなるのである。万人は神の子女であり、神は、我々が彼らをそのような存在として見るように、また、神と我々の共通の家族として彼らとかかわるように呼びかけておられるのである。

統一思想の対象意識は、西洋社会をして、個人主義を超越させ、組織や社会一般において、同胞的な関係を築くために前進することを可能ならしめるものである。統一思想の親なる神という見方は、アジア社会をして、支配者（または企業家）がその部下をあたかも自分の子供のように扱うように呼びかける儒教の命令を乗り越える

ことを可能にする。もし神が真に人類の親であるならば、儒教の命令によって類推によってのみ愛する必要はもはやない。万人は神の子女であり、従って我々は共通の家族の一部であるという絶対的な確実性をもって、愛することができる。新しい基準は支配者のその子供に対する愛ではないであろう。それは神のその子女たちへの絶対的な愛に対する対象意識であろう。

注

- (1) kotkin, Joel and Yoriko Kishimoto, *The Third Century* (New York: Crown Publishers, 1988) p. 104
- (2) 例として、『原理講論』「光言社一九八六年」五九六―八頁 (Divine Principle, Washington, D. C.: HSA-UWC, 1974, pp. 530-532) を参照せよ。このテキストは元々、一九六六年、韓国語で発行された。
- (3) 再び『原理講論』五八五―八頁と五九六―八頁 (Divine Principle, pp. 519-520, pp. 530-532) を参照せよ。
- (4) 後で指摘するだろうが、統一思想において、「道徳」と「倫理」は同義語である。道徳は個人に当てはまるのに対して、倫理は家庭から始まって、社会的な関係に当てはまる。
- (5) Heibroner, Robert L., *The Worldly Philosophers* (New York: Teachers College Press, 1970), pp. 8-9.
- (6) スミスはただ単に経済学者で道徳主義者であったばかりではないということには留意すべきである。彼はま

- た天文学と物理学の、学識の深い学者であった。彼は言語学者、神学者、芸術と文学の評論家、また政治学と法学の専門家でもあった。スミスは人間の知識の体系化された解説を發展させるといふ野心を抱いていた。しかし、彼は、健康問題のため、また個人的および職歴上の回り道（このため彼は時々、学術世界から遠のかなければならなかった）のため、それをすることができなかった。
- (7) ここで扱われている見解は、一九世紀後半のドイツおよび英国の思想史家に由来するものである。『道德情操論』(The Theory of Moral Sentiments) において指導的な道德基準として強調されている「同感」を、スミスは後の彼の著書である『国富論』において「私利」に置き換えており、その点で彼は自己矛盾をきたしている。この思想史家たちは論じている。
- (8) Novak, Michael, *The Spirit of Democratic Capitalism* (New York: Simon and Schuster, 1982), p. 146.
- Ibid.
- Ibid., p. 147.
- (11)(10)(9) 我々は「base」(基部、土台、…) という言葉を「土台と上部構造」(における土台) の意味において使っている。
- (12) アダム・スミス『道德情操論』上 米林富男訳 東京 未来社一九六九年 二八八—二八九頁 (Smith, Adam, *The Theory of Moral Sentiments* [Oxford: Clarendon Press, 1976], pp. 128-131)。
- (13) Outline of the Principle (HSA-UWC), 1980, p. 46 (『概説統一原理レベル4』光言社一九八八年八九頁) 参照。

(14) これは『反抗的人間』(The Rebel)においてカミュの冒頭の陳述である。カミュの所見への言及は Causa Lecture Manual (『カウサ講義マニュアル』)にも発見できる。

(15) このセンチンスにおいて、我々は「公正なる観察者」という言葉を婉曲語法的に使っている。統一主義の観点から見ると、「公正なる観察者」にまつわるスミスの体験は、善靈の影響(神とか霊人)、あるいは彼の良心にまつわる体験のことであった。

* (訳注) お互いが独身のときと同じように社会的・性的に独立した個人であることを認め合った結婚形態(小学館『最新英語情報辞典』第2版より)

(16) Explaining Unification Thought (New York: Unification Thought Institute, 1985), pp. 232-233
参照。

(17) 米ニューヨーク州ベリータウンの統一神学校で行われた統一思想に関する特別二十一日セミナーの講義ノート(未出版)より。

(18) 家庭は他のレベルの人間関係のモデルを提供するものであると儒教は理解しているけれども、それは統一思想とは異なっている。なぜなら、儒教は神の心情理解していないからである。この点で、ユダヤ・キリスト教的伝統を持った国々は、儒教的伝統を持った国々よりも一層容易に統一思想のこの側面を理解できるかもしれない。統一思想は西洋に洞察を提供するばかりではない。それはまた儒教的なアジアにも重要な洞察を提供する。儒教は統治者に国民を息子として扱うように呼びかけているのに対して、統一思想は、

(25)(24)(23)(22)(21)(20) (19)

神が全人類の親であること、従って我々は兄弟姉妹であることを確証している。儒教は統治者や雇用者にその国民や被雇用者を息子として扱うように教えているが、統一思想は、「指導者や雇用者にとって、各被雇用者は真に息子または娘の立場に立っている、なぜなら、各人は神の子女であるからである」と教えている。儒教で言う大家族は類推によるものである。統一思想の大家族こそ本当のものである。

米ニューヨーク州ベリータウンの統一神学校で開かれた、一九八九年統一思想に関する特別セミナーの講義ノート（未出版）より。

一九八九年八月、統一思想セミナー。

Explaining Unification Thought, p. 222.

Ibid.

Ibid., p. 223.

一九八九年八月の未出版の講義ノートからの抜粋。

アダム・スミス『道徳情操論』下 米林富男訳 未来社一九七〇年 四七二—四七三頁 (Smith, Adam, The Theory of Moral Sentiments, p. 222)。

第二セッション論文へのコメント

関西大学経済学部教授
市川公平

トーマス・J・ワード氏は、アダム・スミスの思想と統一思想の比較論評をすることによって、現代の経済学の抱えている問題および世界の経済情勢の考察を行なっている。

これまでの西洋文明および世界の経済学の在り方に大きな影響をおよぼしてきたアダム・スミスの思想を、トーマス・J・ワード氏は次のように解釈する。

アダム・スミスは、利己心に基づく人間活動が分業を可能にし、より効率的な労働管理および経済活動を推し進めると考える。そして事実かかる理念が、西洋文明を発達せしめ、西洋に大きな経済的成果を収めさせたことは周知の事なのである。しかしながら今日、欧米における経済活動には大きななげりが見えている。その原因は一体どこにあるのだろうか。利己心・個人主義の極度の進展が、人間の精神を退化せしめ労働意欲を低下せしめたのであろうか。労働管理は単なる人間の利己心のみによつて進められ、企業の組織体としての効率を低下せしめてきている。トーマス・J・ワード氏は、かかる問題の解決策を、文鮮明師の統一思想に求める。神に基づく愛の実現こそ理想社会の源となる、と彼は考えている。国際化・情報化の進んでいる今日、愛に基づく人的交流が経済活動を活発にする、と説く。さらに、西洋が失いつつある家庭の愛の実現には統一思想が最適である、と考える。西洋における教会がなしえないことを文鮮明師の統一思想は実現しうる、と見なしている。今日、アジア、とりわけ東アジア地域に神の摂理が実現しつつあり、かかる背景の下に統一思想が生まれたと考える。文鮮明師の統一思想は生まれるべくして生まれてきたものであり、我々人類は打解の道をこの文鮮明師の統一思想に求めるべきである、と説く。労働管理、家庭管理、組織管理の糸口を文鮮明師の愛の実践に求めるべきであると、トーマス・J・ワード氏は考える。

以上のような認識が、トーマス・J・ワード氏の考え方である。これに対して、私自身の論評を以下に述べる

こととする。トーマス・J・ワード氏の考え方には、説得性がありするどいものがある。また単に経済学の領域にとどまることなく、広く宗教、哲学の知識を生かし、広い視点からの考察を進めておられる。

ところで、文鮮明師の統一思想の評価は理解できるものの、かかる打解の途を欧米の既存の教会がなぜ答えることができないかに触れて欲しかった。長い歴史を持つ欧米のキリスト教会でなくて、なぜ東洋の統一教会がこれらの課題に応えることができたのであろうか。神の摂理によって東洋の東アジア地域に光が投ぜられていることは、宗教的インスピレーションによっては理解できるものの、学問の領域において科学的に立証できないものであろうか。

現実の経済社会において、欧米の経済活動は低下気味であり、東洋のとりわけ東アジア地域に経済的な活力がみなぎってきていることは、統計上の数字の上からは明らかでない所であり、文鮮明師の宗教的インスピレーションと符合するところである。しかしこのことは、知的生産力である学問の領域では、今日定かなところではない。我が日本においても、今日依然として欧米中心の思考が根強く、世界的に見てもその傾向が強く、世界の頭脳集団は欧米に集中しているといっても過言ではない。かかる傾向が東洋に向かってくるとは、今のところ予測できず、この点においては、文鮮明師の宗教的世界は学問の動きと符合しない。ただ意識の深い学者の多くが文鮮明師の動向に注目していることは明らかであるところであり、かかる知識集団によって文鮮明師の宗教的世界が学問的に明らかになってくることは間違いないであろうと推測できるのである。

何はともあれトーマス・J・ワード氏の論説は、画期的なものであり、我々経済学者としても注目に値するところである。経済学の創始者であるアダム・スミスの思想と文鮮明師の宗教的世界を結びつけて、考察されたことは、注目に値するところである。何はともあれ我々経済学者としてはアダム・スミスを無視することはできず、

文鮮明師の宗教的世界をアダム・スミスの視点より解明することが、経済学者としての学者的良心であろう。時あたかもベルリンの壁が除去され、マルクス経済学もその終りを告げようとしている。我々経済学者としては、文鮮明師は宗教的インスピレーションによってマルクス経済学の矛盾を明らかにされているが、そのことを学問的に明らかにすることが急なる責務である。その意味では、トーマス・J・ワード氏の論説は画期的なものであり、われわれはかかる業績を足がかりにして今日的課題に答えていかなければならない。